

名所図会解釈の可能性

——秋里籬島の句の働きについて——

ロバート・ゴリー

一 はじめに

本論では、近世中期から後期に人気だった名所案内記の一種である名所図会がなんのために出版されたのか、どんな原則によって編纂されたのか、また、どうしてベストセラーになったのか等々を学際的な立場から考察し、名所図会そのものの歴史を物語るような研究を目指す。名所図会は名所の記述と画像を通じて、読み手である当時の民衆に、本のなかに描かれた都市や街道など未知（あるいは既知）の環境を仮想体験させるという役割を果たすものである。その仮説に基づけば、名所図会は旅行のための実用的なガイドブックというより、空間認識を充実させる楽しい教育的な本だと考えたほうが適切である。そのような編纂目的を理解するために名所図会の序文にしばしば言及される「臥遊」（すなわち、居ながらにして、遠い場所に自らを遊ばせることができること）の実態を検討する必要がある。

秋里籬島は名所図会の編集者としてよく知られているが、浅野三平氏や藤原玲満氏が指摘されたように、詩人としても活発に活動していた文人である。京都の練石のもとで俳諧を学び、伴蒿蹊のもとで和文を学んだ。俳諧についての本も多種出版した。例えば、安永五年（一七七六）の『俳諧早作伝』は入門向きの実用的な本であり、寛政十二年（一八〇

〇）の『俳諧続翠檜』は句の解説を中心とする教科書的な本、寛政七年の『俳翼』は芭蕉と其角の句を集めたうえで句作へのアドバイスを行うアンソロジーである。籬島が、和歌や俳句に関心をもつ文人であるということは過言ではないであろう。従って、籬島が編集した名所図会に収録された籬島自身の句は、単なる意味のない飾りではなく、本の中心的な記述をなうものとして、丁寧に作られたものであると思われる。

本論では、八本の名所図会、すなわち、安永九年（一七八〇）の『都名所図会』、寛政三年（一七九二）刊の『拾遺都名所図会』、『大和名所図会』、寛政八年（一七九六）の『和泉名所図会』、寛政八年（一七六九）の『摂津名所図会』、寛政九年（一七九七）の『東海道名所図会』、享和元年（一八〇一）の『河内名所図会』、文化二年（一八〇五）の『木曾路名所図会』を取り上げ、籬島が詠んだ和歌や発句を、文学的な視点から検討する。しかし、名所図会は文学の作品として考えるべきであるとか、籬島は素晴らしい古典文学の作者として登録されるべき人物である、というような内容を議論するのではない。また、名所図会を解釈するために和歌が分析の鍵であるとも考えられない。ただ、詩文に意味を込める傾向をもつ籬島自身が編集した本に収録された詩文により深く注目することが、名所図会そのものを解釈することに役立つと考えている。しかも、籬島の句は、文学の世界につながる編集目的の「臥遊」と関係が

あるといえるであろう。

具体的にいえば、先の八本の名所図会の中には籬島が詠んだ和歌、発句、漢詩が一〇〇点以上ある。今回はそれを分析することで、それらの句にどんな機能があるのか、挿絵や本文の中でどんな役割をはたし、何を伝えているのか、という問題を検討してみよう。詩文の働きには、九の特徴がある。それは、広告としての句、風景賞賛としての句、日常性の面白みとしての句、感覚的に人を刺激させる句、歴史・伝説を想像させる句、編集者の籬島が文学者であると認識できる句、文学的に楽しむ句、旅そのものを描写した句、そして、女性の心に訴える句という特徴である。それでは、それぞれの特徴がもつ機能について紹介する。一つずつ代表的な句を検討していく。

この分析方法をとおして、名所図会の中の詩文がもつ働きや意味を探るといふ文学的な課題と、その一方で、詩文のもつ機能を利用し、地理書を編纂する目的や方針、または、編集者の主観（バイアス）にどんな特徴があるかという歴史的な課題も検討できると思われる。つまり、これは、地理の考え方から文学が理解できると同時に、文学の考え方で歴史地理学も理解できる一石二鳥の考えだろうと思われる。

二 広告としての句——彦根市鳥居本町

名所図会によく見る広告の句の機能を紹介する。茶屋、料理屋、宿という店自体を広告する句や、薬、扇、水瓜、饅頭、蕎、お酒という名物自体を広告する句がある。例えば、『木曾路名所図会』の第一巻には、この挿絵のキャプションとしての狂歌が掲載されている(図1)。

くれなゐの花にいみじくおく露も薬にならひ赤玉といふ



図1 秋里籬島『木曾路名所図会』、ハーバード大学イェンチン図書館所蔵

西村中和の挿絵の中に、輿に座ってこの鳥居本の店を覗いている旅行者がいる。店の中に「神教丸」と書いてある看板があるので、薬を販売する店だと分かる。神教丸というのは腹痛や暑気あたりなどに効く江戸時代の人気薬であった。この店は有川という人が作った神教丸を売っている。

絵図を見るだけで、旅行者が「神教丸」に興味を持つのは明らかだが、籬島の狂歌が付け加えられているので、薬という名物が読者により強いインパクトを与えるだろう。赤い花を薬に見立て、この薬の赤い色をより一層印象付けている。印象付けることによって読者に薬の名前を覚えてもらうためにこの薬が花のようにきれいな色をもつことを滑稽的に表現している。また、この店は新名所だが、詩文で表現されることにより、店が文化的な価値を持つように見えるという効果もあると思われる。

要するに、狂歌と挿絵の組み合わせは、なぜこの場所は面白いか説明

すると同時に、商品も広告する働きがある。このように籬島は編集者としての立場を利用し、客観的な編纂ではなく、主観的なバイアスが含まれる情報を提供していたのだと思われる。

三 風景賞賛としての句——塩尻

次は風景賞賛としての句を挙げる。籬島が編集した名所図会には、山川、海の自然的なパノラマを写生する挿絵と詩文の組み合わせがたくさんある。例えば、『木曾路名所図会』第三巻の「塩尻」という名所は代表的で、西村中和が書いたものである(図2)。左上に座っている人物は塩尻の山道から眺めを見ている。籬島の句を読むとこの人物が何を見ているか分かる。

塩尻嶺より富士遙かに見ゆる

月千里はるかに富士と諏訪の湖

富士山と諏訪湖を見ていることは確かであるが、月の光で見ているようだ。しかし、絵図を見れば、空は明るくて夜ではなさそう。つまり、籬島の句で夜の景色を描写する一方で、中和の挿絵では昼の景色を描写するという解釈はおかしくないが、絵図を見れば見るほど他の解釈もできると思われる。挿絵の下部に描かれた阿礼神社や店の正面には、作業などする人物は全くいない。このような名所図会の挿絵は一般的に人物が多くて賑やかな雰囲気だけれども、この挿絵の中には旅行者ばかりで、もの売る商人も神社の前を掃く人などもない。昼であつたらあり得ない状況だろう。

これらのことから、この挿絵が、店などが閉店している夜の景色であり、塩尻の山道に座っている人物が明るい月の光で景色を見ていると読

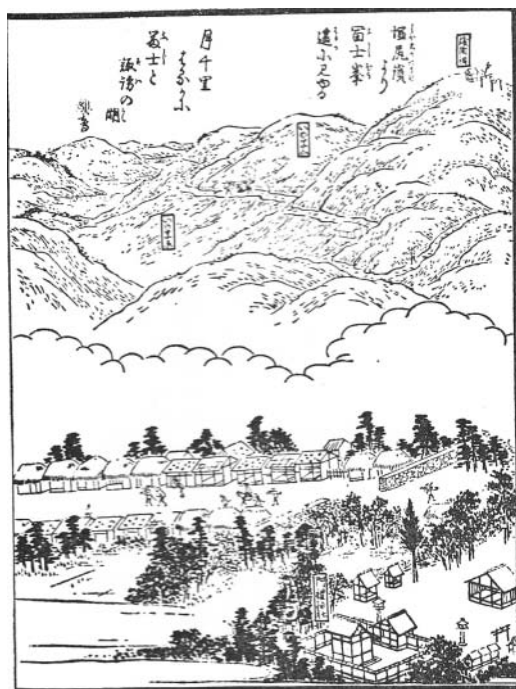


図2 秋里籬島『木曾路名所図会』、ハーバード大学イェンチン図書館所蔵

み取れるだろうか。また、籬島の発句には、ただの写生的な働きだけではなく、名所の由来について暗に示す働きもある。本文では、塩尻は分水嶺なので塩尻と名付けられると説明されている。つまり、水は東の太平洋に流れ、西の日本海に流れるという説明だ。この地理的な説明に対して、挿絵の発句が滑稽味を含んだ説明を添えていると思われる。この名所が塩尻と名付けられたのは、挿絵に描かれたような月夜に、諏訪湖の端に頂上をのぞかせる富士山が本物の塩尻のように見えるからだそうだ。実際の地理的な理由や説明とは別に、少なくとも、この発句がなければ、挿絵はうつくしい挿絵にすぎず、そこに描かれた景色そのものについて深い理解や強い印象をもたせることはない。

四 日常性の面白みとしての句——大悲山／長村付近

次は、ハッと面白い日常の句を挙げる。風俗だけではなく、場面を記録する詩文だと思われる。これらの句は、人物が大きく描かれて挿絵の中に配置され、泥だらけになつての草取り、小さい輿に乗り込む相撲とりなど、いろいろな仕事をしている人物を画く。これらは名所について説明するというより、鋭い目を持つ籬島の描写力を示す働きをする。

例えば、『拾遺都名所図会』第三巻の林業に関する発句と挿絵の組み合わせがある(図3)。本文では、この地域のお寺や神社などの名所は強調しているけれども、林業の場面についてなにも言及していない。しかし、挿絵は林業で仕事する人物を描写している。この場面では、道具を使って山の上から下の川沿いに丸木を運ぶ作業と、冷たい雪のなか火で手を暖めながら休憩する人物を写生した挿絵に対して、籬島の発句が注釈のような働きをしている。

帆柱や風も雇はず雪転し

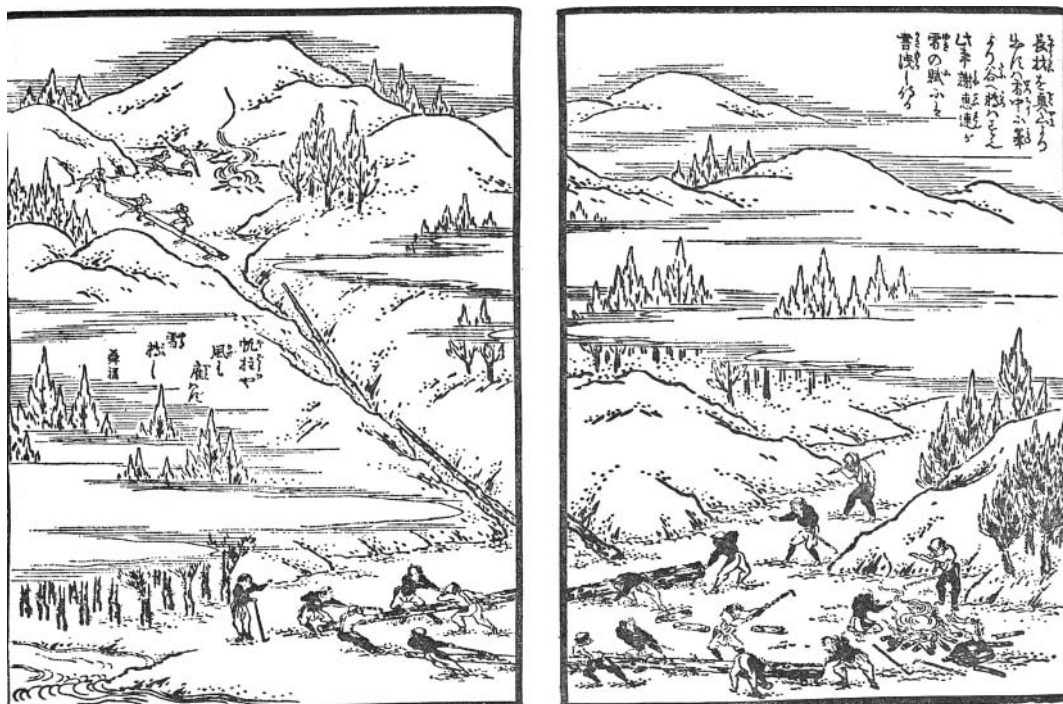


図3 秋里籬島『拾遺都名所図会』、ハーバード大学イェンチン図書館所蔵

この句では、山に落ちる丸木と帆柱を比べている。丸木は船の帆柱と違い、風ではなく雪を利用して動かされている。ただの滑稽な見立てではなく、まもなく丸木が船のように運送されることをふまえたうえで、雪の中で船の帆柱に見えることを示した句だと思われる。

挿絵の右上に、この冬の林業の光景は江戸中期の（謝惠連が書いた）

『雪の譜』という本に書き落とされているため、名所図会に書き込んだと説明されている。つまり、この滑稽的な句からは、籬島が俳人であるだけではなく、徹底的に観察力の鋭い地理編纂者であることがうかがえる。このことは、籬島を、じゅうぶんな知識を持った信頼できる地理案内者に見せるだろう。

五 感覚的に人を刺激させる句——勢州四日市／伊勢

今までに検討してきた句はある程度五感を刺激させる働きもあり、新教丸の赤さ、白い富士山、寒い冬の暖かい火というような写生的な句と挿絵は、読者にそれぞれの名所にいるような感覚をもたらす。しかし、ここではもつと積極的に五感を刺激する句を紹介する。

例として『東海道名所図会』第二巻に那古浦の挿絵と、句を挙げる（図4）。

蟹楼を見て

陽炎や栗飯かしぐ浪のうへ

籬島の句によれば、このオアシスのような現象は、米を炊くことにも見えるという。炊いた飯に見えるかもしれないが、何となく大きな建物と揺れる幟が見えるだろう。挿絵は、本文で説明されている地元、特に漁夫の伝説を表わしているのだ。つまり、この陽炎は建物だという意見が

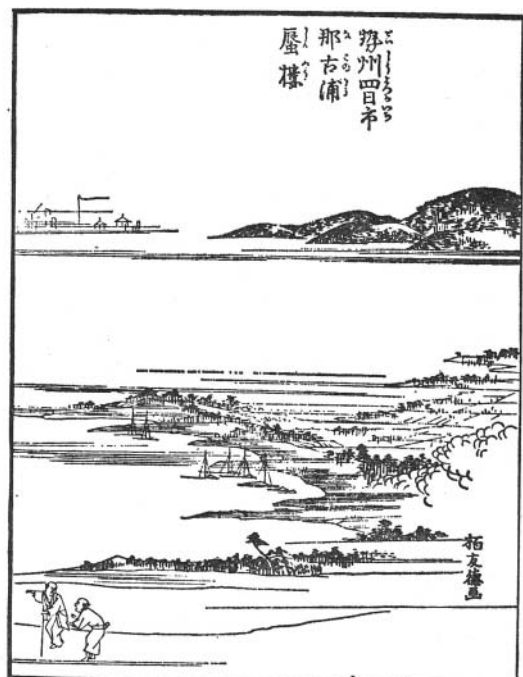
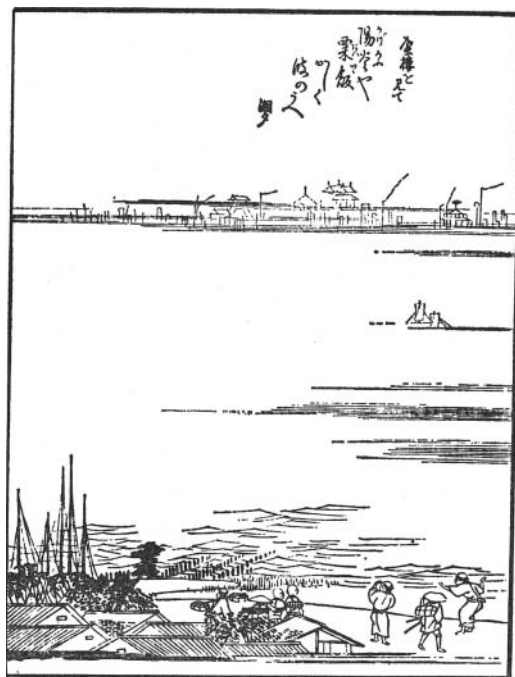


図4 秋里籬島『東海道名所図会』、ハーバード大学イェンチン図書館所蔵

一般的だった。

籬島が一般的な意見と違う句を付け加えたことで、読者はこの不思議な現象にどのような意味があるかを考えさせられる。建物なのか、炊いた飯なのかと考えを巡らしたことだろう。この二つの見方で、この蜃気楼の曖昧なビジュアル状況がリアルに感じられるのだろう。人によっては蜃気楼ということ、建物か飯に、もしくはまた違う何かに見えてもよしとする作者の意図が見られる。

また、ここで、籬島が単純な写生的な句を詠んだというわけではなく、句のなかに滑稽的な雰囲気も詠みこんでいる。というのは、安永四年（一七七五）に出版した恋川春町の『金々先生栄花夢』という黄表紙を知っている読者は文学的な解釈もするだろう。この人気の本の中、田舎者金村屋金兵衛という主人公が、目黒不動で名物の栗餅を待っている間、多種多様の立派な建物が存在する栄華的な世界を夢で見ている。

しかし籬島はその話を逆にして、挿絵と句に滑稽味を添えている。つまり、餅が出来上がる間に栄華を夢見るのではなく、実際に栄華的な世界のようなオアシスを見ながら、炊いている飯を想像してしまうという意味にしてしまっている。だから、籬島の句は、この不思議な視覚的な現象をもって読者の五感にうったえかけ、感覚的に印象付けさせるように刺激していると判断できるだろう。

六 歴史・伝説を想像させる句——矢口渡口／東京都／玉川

続いて、歴史や伝説を想像させる句を紹介する。例として、『東海道名所図会』第六巻にある、新田義興と足利家の戦争の場面を北尾政善が描く挿絵を交えて紹介する。この挿絵は、義興が矢口渡して殺される有名な場面ではなく、右上のキャプションが説明しているように、亡くなった義興の幽霊が自分を殺した江戸遠江という人物を殺す場面、黒い雲に

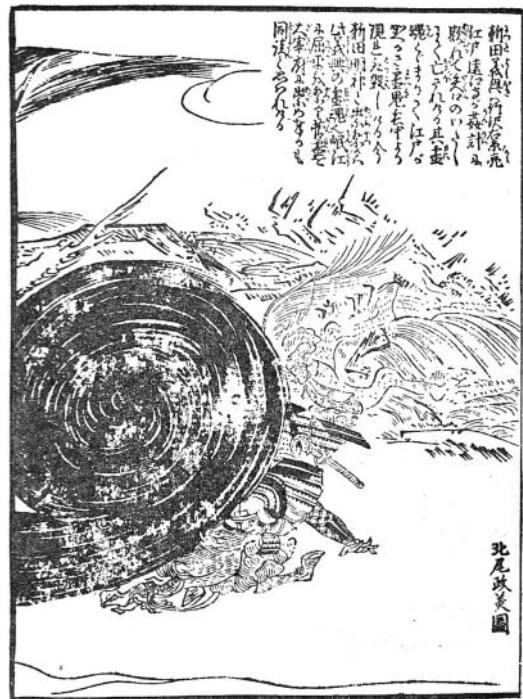


図5 秋里籬島『東海道名所図会』、ハーバード大学イェンチン図書館所蔵

乗った、騎馬の義興が、遠江を潰す瞬間を描いている(図5)。本文の説明のように、事件の後、矢口渡しで義興の燃えるような矢を見た地元の人々は、怖くなり、義興の御霊をなだめるために神社を造った。

このように絵図を見ることで、籬島が伝説的な場面をどのようにとらえたのか想像できるだろう。籬島の発句のおかげで伝説はただの過去のことだけではなくて、現在まで繋がっていることがわかる。

ほたる火やなき玉川のゆめのあと

つまり、義興が死んでしまった矢口渡しという意味がありながら、亡き魂(すなわち幽霊)とかけているので、義興自身という意味にもなるだろう。そしてこの夢で見たものは、挿絵に描かれた場面と同じものであると解釈できるだろう。また、義興の夢から起きたら、螢を見たことを表現した句でもある。

籬島が螢を詠んだ理由は、実際にその場所に螢が生息しているだけではなく、螢を燃えるような矢と見立てたからでもある。螢は、夢で見た想像的な伝説、つまり義興の足跡を意味しており、義興の象徴ではないだろうか。このように暗示することで、伝説は現代にも繋がりが、読者は歴史を追体験することができると思われる。この句と挿絵の組み合わせは、義興が没し、御霊もしずめられたにもかかわらず、螢としてまだ存在しているように読者に想像させるのだ。

七 編集者の籬島が文学者であると認識できる句——吉野

籬島は自分が詠んだ句を名所図会に引用することで、文人としてのアイデンティティを表わしている。句のなかには籬島が本格的な文学者であると認識できる句もあり、認められるべき詩人であることを自認する

傾向もある。例えば、『大和名所図会』第六卷に西行に関する「苔清水」という吉野の名所がある。この名所に挿絵はないが、本文では西行がこの苔清水という庵に住んだと説明されている。また、苔清水が和歌によく見える名所であると書き、西行の『山家集』という私集から一首を引用している。

浅くともよしやまくむ人もあらし我にことたる山の井の水

また、籬島は芭蕉の『泊船集』という書物から俳文を抜萃している。抜萃からは芭蕉が西行にたいして尊敬感を強くもっていたことが分かる。芭蕉の一句を引用する。

凍解けて筆に汲み干す清水かな

西行も芭蕉も名所の水を賛美している。さらに、項目の最後に籬島の句が付け加えられ、あとがきのような役割をはたしている。

苔清水ことたる外にほととぎす

西行と芭蕉が苔や清水のみを賛美しているのに、籬島は時鳥というモチーフもよみこみ、時鳥もいれはいないという滑稽的な響きを含ませている。自分の句を挿入することで、自分が西行と芭蕉のような天才詩人と肩を並べる者であると暗示させているとも解釈できる。少なくとも、この項目を読んだ読者は、籬島は西行と芭蕉のようにこの名所の詩的な世界を充分味わえる優秀な詩人であると認識し、籬島が立派な詩人になる大望を抱いていることも感じるのではないか。

八 文学的に楽しむ句——静岡市丸子泉が谷

次の詩文は、籬島が文学者であることを認識させる句に関連するが、異なった特徴を持っている。籬島は、文中に挿入した自分の句全てに文学的な楽しみを盛り込んでいる。その中でも、もっとも洗練されている句を紹介する。例えば、『東海道名所図会』第四卷に「丸子駅」という項目に二つの発句がある。まず、芭蕉が駅の名物とろろ汁を詠む句が出る。

梅若菜丸子の宿のとろろ汁

次に、籬島の句も出る。

とんとんと路次をたたいて
炬びらきをしらせに
来たがるすにぞ
ありける

ざっと読むだけでは、意味が分かりにくい一首だ。なぜ、炬開きの知らせが来ると誰もいないのだろうか。丸子駅との関係はいったい何だろうか。

しかし、籬島の句を丁寧に読めば、これは折句であると分かる。折句とは、各の句の上に物名を一字ずつ置いたもので、この場合は芭蕉の句の「とろろじる」という言葉を表わす。芭蕉の句に自分の句を付け加えると同時に、夕暮れに誰もいないという謎解きになり、つまり、皆とろろ汁を食べに行ってしまったというヒントを句のなかに盛り込んでいる。このような言葉遊びが読者を文学的に楽しませるのだろうか。

九 旅そのものを描写した句——愛宕山

次は、旅そのものを描写した句を紹介する。この句と挿絵の組み合わせで、名所そのものというより、名所を経験する旅行者に着目している。『都名所図会』第四卷の「愛宕山」の挿絵のなかに書き入れの詞書と狂歌は次のとおりだ(図6)。

あたご参りの皿竹輿をかりて行くを見て狂歌をよめる
桃盛ったようにころころ打ちのりて山はさかさしみちとせを行く

これは、親子の旅行者が山に登る様子を見、険しい山道を上がる親子が皿にのった桃が揺れているようにみえると描写した写生的な一首だ。こ



図6 秋里籬島『都名所図会』、ハーバード大学イェンチン図書館所蔵

の句が挿絵の内容をよりリアルに感じさせるのだ。

本文では、この乗り物は楽しいだけでなく、特に老人、女性、子供に便利な移動手段であると強調している。挿絵だけではなく、籬島の狂歌があるからこそ、この名所が読者にとって、より印象的になると思われる。これは一例にすぎず、他の籬島の句と挿絵の組み合わせにも、旅そのものを賛美するものがある。

十 女性の心に訴える句——峰定寺門前より東

最後に女性の心に訴える句を紹介する。籬島の詩文が付けられた絵図には、多くの女性が含まれている。この報告で紹介したものも例外ではない。たしかに名所には地元の女性や旅をしている女性が実際にいたが、なぜ籬島は女性が描かれている挿絵に好んで自分の句を載せたのだろうか。

『拾遺都名所図会』第三巻の「大悲山乳岩」という挿絵は、岩の裏にある婦人の乳房に似た十四個の突起から水が落ちており、名前の由来となっている(図7)。籬島は、句を通じてこの岩の特徴を描写している。

乳々とふところ捜すさざれ石その乳母の名はお岩とのなり

この例では女性自体は描かれていないが、女性的な現象が描かれている。挿絵の中の男性達がうれしそうに水を引き出しており、籬島もこのような現象を面白いと思いついたかもしれない。

しかし、本文には、女性がこの水を飲めば、たちまち母乳がでると説明されており、ここが子をもつ女性に役に立つ名所とわかる。つまり、この例は男性向きの挿絵と句の組み合わせであるだけではなく、女性の心に訴える働きもあると解釈できる。要するに、女性の読者は籬島の句



図7 秋里籬島『拾遺都名所図会』、ハーバード大学イェンチン図書館所蔵

に気づき、名所図会の編集者が女性の気持ちを考えてたと考えるだろう。編集者としての籬島の戦略であると思われる。

十一 おわりに

本論のはじめに、地理のなかの詩文がどのような働きや意味などがあるか、という文学的な課題と、その一方で、詩文の機能を通じて、地理を編纂する目的や方針、または、編集者の主観などにどのような特徴があるかをおして、歴史的な課題に取り組み予定であることを書いた。この二つの課題について簡単にまとめ、四つの意見を述べる。

一 籬島の詩文は無用な飾りではなく、戦略的な手段として名所図会の世界に盛り込まれている。一つの狂歌や発句が一つの働きを優先させながらも、いくつもの働きが重なっている場合がある。全般的にいえば、主な詩文はヒュモアが盛り込まれている説明的な情報を伝える働きがある。

二 籬島の詩文は挿絵に描かれている絵図と関係しあい、絵図は詩文と関係しあい、絵図と詩文両方を理解するのに役立つ。従って、編集者の籬島は絵師と親しいコラボレーションというかたちで名所図会を制作し完成させたと推測できる。

三 籬島は詠んだ句を通じて、読者に名所をどのように過ごせば良いかを教える。籬島の詩文には、地理をうまく理解し、楽しめるようなヒントがある。実際に旅行をせずに部屋にいながらにして想像上の旅、すなわち「臥遊」をする時は、句を読めば読むほど、挿絵や本文で描かれている空間がもつ印象的になり、入り込むことができる。要するに、想像旅行をするために詩文が手段として利用されているのだ。籬島の句があるので、買い物を楽しむ、歴史感、五感、文学の遊びなどの視点から、名所を生でより深く感じ、認識できる。

四 名所図会はあるのままの風景を写生的に描出し、地理空間を描写している。その一方、籬島の詩文を通じて、編集者の主観的な好みや価値観が理解できると思われる。少なくとも、以上の詩文の機能を通して、名所を籬島のように過ごせば良いという読者への提案があり、自分の句を通じて、籬島が名所に実際に行き、見聞した事が確認でき、さらに、籬島は文学的な才能もあると確認できる。籬島は、詩文を書き、名所図会の編集をし、総合的な知識を持つ信頼と説得力のある案内者であった。

(付記) この論文は、二〇〇九〜二〇一一年度科学研究費補助金基盤研究(A)「地図史料学の構築」の新展開―科学的調査・復元研究・データベース―(研究代表者東京大学史料編纂所・杉本史子、課題番号・21242018)二〇〇九年度シンポジウム報告を原稿化したものであり、同科研の研究成果の一部である。

参考文献

- 朝倉治彦編 『日本名所風俗図会』 8 京都の巻Ⅱ「都名所図会」角川書店 1981年
- 朝倉治彦編 『日本名所風俗図会』 8 京都の巻Ⅱ「拾遺都名所図会」角川書店 1981年
- 朝倉治彦編 『日本名所風俗図会』 9 大和の巻「大和名所図会」角川書店 1983年
- 朝倉治彦編 『日本名所風俗図会』 10 大和の巻「撰津名所図会」角川書店 1980年
- 朝倉治彦編 『日本名所風俗図会』 11「和泉名所図会」角川書店 1981年
- 朝倉治彦編 『日本名所風俗図会』 11「河内名所図会」角川書店 1981年

- 朝倉治彦編『日本名所風俗図会』17 諸国の巻Ⅱ「木曾路名所図会」角川書店 1981年
- 朝倉治彦編『日本名所風俗図会』17 諸国の巻Ⅱ「東海道名所図会」角川書店 1981年
- 浅野三平「秋里籬島」『女子大国文』71号 1973年10月
- 西野由紀「『名所図会』本の挿絵における和歌・発句の有効性」『国文学論叢』2001年2月
- 藤原玲満「国文学研究資料館『秋里家譜』翻刻と解説」『国文学』110号 2008年12月
- 藤原玲満「秋里籬島の俳諧活動」『近世文学』78号 2003年7月